滋賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学
No. 59, pp. 1 － 8, 2009

ジェイン・オースティンの受容
―― 明治期から昭和初期にかけて ――

岩　上　はる子

Reception of Jane Austen in Japan Between the late 19th and the early 20th Centuries

Haruko IWAKAMI

序

日本におけるジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の受容は遅い。明治期に実質的な紹介をしているのは夏目漱石くらいで、漱石の高弟である野上豊一郎による『高慢と偏見』の上巻の翻訳が出たのは大正の末であり、全編が出版されたのは昭和に入ってからである。だが、『高慢と偏見』は野上彌生子の『真知子』の下敷きとなり、さらに翻案小説『虹の花』を生み出すという受容の歴史をたどった。本稿では明治から昭和初期にかけてのジェイン・オースティンの受容の軌跡を、*Pride and Prejudice* を中心に追ってみた。

(一)

ジェイン･オースティンはジョージ･エリオットやブロンテ姉妹とならんで､明治中期から『女学雑誌』にその名前はあげられているが、伝記や作品などの実質的な紹介はまったくと言っていいほどなされていない。ブロンテ姉妹への言及が見られた『国民之友』や『早稲田文学』などにも、オースティンに関する記事は明治期にはほとんど見あたらない。オースティンに目を向けたのは、やはり専門の研究者たちで、明治期におけるオースティンの紹介状況をたどるには、かれらによる英文学史や英文学辞典などにおける記述を探ることになる。ここでは明治期に出版された主要な英文学史の中から、いくつか紹介してみたい。

最初にあげる坪内逍遙の『英文学史』（東京専門学校出版部、明治 34 年 <1901>）は、明治 19 年 <1886> に東京専門学校（現在の早稲田大学）に英文学科が設立され、その講義録を『早稲田文学』に「英文学史綱領」として連載していたものを土台としている。刊行にあたって大幅に加筆修正が行われ、全体で 900 頁を超える大作となっている。緒言において、ブルック、ダウデン、セインツベリ、テーヌなどに多くを負ったことが記されているように、海外における英文学の評価を文芸思潮と併せて通史的に紹介することを目的としたものである。この時代にはイギリス本国ではオースティンの作品は、文学史において「古典」として位置づけられており、逍遙においてもその評価がそのままに反映されている。

オースティンについての記述は､ウオルター･スコットと並んで大きな比重をしめている。大がかりな歴史小説やロマンスを手がけたスコットに対して、田舎のジェントリー階級のごく限られた登場人物たちの日常に徹したオースティンだが、逍遙は両者を 19 世紀小説の生みの親として評価し､「若しスコットにして十九世紀に於ける伝奇（ローマンス）（歴史物）の父たらば、オースチ

ンは正に十九世紀に於ける小説（ノベル）（世話物）の母なるべし」(漢字は当用漢字に改めた。以下同様）として位置づけている。

> オースチン女史の筆法にはフィールチングとリチャードソンとの長所をやゝ低き度に於て結合し、これに近世の彩色を加へたるが如き趣あり、すなはち彼れの如く豊穣機敏ならざれども、真摯と生気とはむしろ彼れに優るべし。而して精到なる反語に女性の俤を寓したる、対話の筆致の繊細なる、乃至人心の動機及び諸種の気質の分析の緻密を極めたるなど、頗るリチャードソンに似たる所あり、女史は近世小説壇の一明星といふべき也。

『小説神髄』(明治 18 年 <1885>）において「小説の主脳ハ人情なり世態風俗これに次ぐ」と宣言し、近代写実主義小説の理論を打ち立てた逍遙が、オースティンの小説世界で高く評価したのは、気質の分析の緻密さ、反語（アイロニー）、対話の見事さである。

逍遙によって「小説の母」と位置づけられたオースティンだが、ラフカディオ・ハーンは『英文学史』（東京帝国大学での明治 29 年から 36 年 <1896-1903> までの講義録）において、オースティンの人物の劇的な面白さはシェイクスピア的だとしながらも、文学的教養が備わっていなければそのよさは理解できないのではないか、と微妙な発言をしている。

> 今日でさえ、文学的教養が十分でないと彼女の小説の並外れた長所を理解することはできない。ありふれた品のない人たちには理解が届かないのである。表面的にはともかく、その内面の意味の理解は。（中略）少なくとも彼女の作品の一つは読んでおかなければならないが、そこに描かれているような生活、人々、悩みや愚行などは、あなたがたの多くには奇妙に思われるのではないだろうか。[1]

オースティンの小説に描かれた 19 世紀初頭のジェントリー階級の社会、その風俗習慣、文化的背景について知識の乏しい当時の日本人の学生にとって、はたしてオースティンを理解できるかという疑問を、ハーンは抱いたのである。

逍遙から 5 年後に刊行された栗原基・藤沢周次の『英国文学史』（博文館、明治 40 年 <1907>）は、序に記されているように、「一般読者にても容易に読み得る邦文の英国文学史」を提供することを目標としたものである。参考文献は逍遙があげたものとほぼ同じだが、さらに、筆者たちが東京帝国大学で受けたハーンの講義録に負うところも大であったことが記されている。夏目漱石の前任者であったハーンは、日本人学生にとってわかりやすく情感溢れる英文学の講義によって人気を博したが、その薫陶を受けた筆者たちは、作家の伝記、作品、特徴、影響などを簡潔に紹介している。

オースティンについては、ゴシック小説などの不自然さを風刺して、自分の作品では平穏な中流社会の家庭生活を描いて真実を描写したところに古びない理由があるとして評価する一方、ブロンテとの対比を行っている点が眼を引く。

> オーステンは結構の発展及び人物波瀾の排置に長じたりと雖、之れをブロンテのものに比するに活気少なく平凡に傾けり。ブロンテは常に熱烈なる想像と燃犀なる直覚とを以て苦痛の中にある深刻なる人性を描けり。但し其観察の一方に偏せしは其経験の狭隘なるためなりき。

オースティンの小説の巧さは疑いを容れないとしても、その世界が情熱や想像をかき立てる性格のものではないとしている。逍遙によるオースティン絶賛の論調からは少し後退した観がある。スコットについての評価も「唯吾人は彼［スコット］はオーステン女史と共に十九世紀初葉の大立物となり、オーステン女史は小説の母となり、スコットは伝奇物語の父となりしことを記憶すれば足れり」と、逍遙の表現を借用して素っ気ない記述に留まっている。

浅野和三郎の『英文学史』（大日本図書、明治 41 年 <1908>）は、明治期においてはまとまったものであり、米国文学史や英詩の解説までを含む 1000 ページを超える大著である。オースティンを思潮の変遷のなかで捉えることを試

み、写実小説が18世紀後半に衰退し、ロマンティックな精神にあふれる新派が勃行してくるが、これが極端な夢魔的なものに走りすぎ、受け入れられなくなってくるという流れを紹介した上で、オースティンの出現について次のように述べている。

> かゝる際にあらはれ出でゝ或る程度迄両派の特長を打して一丸となし、十八世紀小説と十九世紀小説との間に連鎖を作れるものをヂェーン・オーステン等の女流作家となす。是等の作家の描く所は、重に日常見聞する所の家庭内部の此事にして、平淡の裡に興味を求め、風刺の筆に清新の趣味を寓しぬ。（傍点省略）

オースティンの作品が平凡な中流または上流社会の日常を描いて、そこには特別な事件もなく、平凡な男女が登場するだけだが、読み始めたら通読せずにはいられないのは、ひとえに作者の技量によるものとして、構成の手腕と性格描写の巧妙さをあげている。それでも、その作品が一見、あまりにも日常的な事柄を扱っていて、読者の胸躍らせるような事件や恋愛の展開があるわけでもなく、歴史的大事件や深遠な思想を含むものでないことに、浅野はやや不満げで、オースティンの小説世界について次のように述べている。

> 但し女史が人生の苦難と、知識とに欠乏したる結果として、その描ける範囲は甚だ狭きを免れず。篇中の人物は、単に宴会、訪問、舞踏、恋愛等にのみ日を暮らして他に何事も知らず、雄大の情熱、高遠の思想等には、毫も接するに由なし例へば精巧なる象牙の彫刻の如く、又数寄をこらせる四畳半の茶座敷の如し。隅から隅まで瀟洒とて一点非難を加ふべき所はなけれど、何となくさゝやか也。深さと高さと又広さとを欠けり。女史をとつてブロンテ、エリオットの側におかんは可也。その上に出でたりとなす一部評家の言は吾興せず。（傍点省略）

オースティンの狭く完結した世界が「深さと高さと又広さ」に欠け、ブロンテやエリオットに勝るものではないとしている。ハーン以降の研究者や評論家たちが、オースティンを「文学者」として認めながらも、あくまでも「日常」に徹した世界を評価しにくいという一面はあったのである。

浅野がブロンテに歩があるとしたのも道理で、彼は『嵐が丘』を日本で最初に評価した人物と思われる。ブロンテ姉妹が出版を試みた最初の三作の小説（『教授』『アグネス・グレイ』『嵐が丘』）のなかで、「最も傑出せるは、エミリイの『ウザリング・ハイツ』にして、凄惨崇大、詩的情熱の非凡なることを示せり。他の二作は凡作なり」と述べている。同じようにシャーロットの『ヴィレット』についても、英国が舞台ではなく構成上に少し難があるため『ジェイン・エア』ほど愛読はされていないけれども、「心理的興味においては是にまさり、また得難き傑作たるを失はざるなり」という評価を与えている。

明治期にオースティンをいち早く評価し紹介したのは夏目漱石である。文学批評をより科学的で論理的なものとして体系づけようとした漱石は、オースティンを写実主義の作家として評価している。東京帝国大学での講義録を元にした『文学論』（明治40年<1907>）[2]に、次の一節がある。

> Jane（ジェーン） Austen（オースティン）は写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技（わざ）神に入るの点において、優に鬚眉（しゅび）の大家を凌ぐ。余いふ。Austenを賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなりと。

「鬚眉の大家」とはフィールディング、リチャードソン、スコットらを指すと思われるが、彼らを凌ぐオースティンの写実の力量を「神業」と絶賛している。その一例として『自負と偏見』の書き出しでベネット夫妻のやりとりの一節を取り上げ、その一見平凡に見える会話の描写が、この夫婦の性格や日常を語っているところに写実の妙があるとして分析してみせる。

Austenの描く所は単に平凡なる夫婦の無意

義なる会話にあらず。興味なき活社会の断片を眼前に髣髴せしむるを以て能事を畢(おわ)るものにあらず。この一節のうちに夫婦の性格の躍然として飛動せるは文字を解するものの否定する能はざる所なるべし。（中略）この一節によりて彼らの平生を想見するは容易なり。即ちこの一節は夫婦の全生涯を一幅のうちに縮写し得たるの点において尤も意味深きものなり。

自然主義全盛期であった当時の文学状況のなかにあって漱石がめざしていたのは、余裕のない切羽つまったような自然主義の小説に対置される「余裕派的写生文」であった。[3]「写生文家は泣かずして他の泣くを叙するもの」という喩えで示されているように、作者は題材を淡々と観察しその光景を楽しみながら写実する力が求められる。『高慢と偏見』はまさにこの創作態度にぴったりのものであり、漱石がオースティンから受けた感銘を推し量ることができる。

漱石によるオースティンの評価は、後に彼の弟子であった野上豊一郎が*Pride and Prejudice*を『高慢と偏見』として翻訳することにつながり、さらに野上彌生子がこの作品を下敷きにした『真知子』を発表し、『虹の花』という翻案小説を生み出すことへと発展していく。

(二)

明治期にオースティンの名前は文学史に連ねられているものの、実際に作品が読まれるようになったのは大正期から昭和初期にかけてと思われる。日本における英文学の普及において、重要なものとして二つの大きな事業があげられる。一つは研究社英文学叢書の出版である。これは市河三喜と岡倉由三郎を編集主幹として、主要な英米文学作品について詳細な訓詁・注釈を施したもので、大正10年<1921>から約10年をかけて合計100点が刊行された。もう一つは玄黄社の国民文庫刊行会による「世界名作大観」の刊行である。同社は大正3年から昭和4年にかけて「泰西名著文庫」「泰西近代名著文庫」も併せて刊行し、これら三つの翻訳叢書は全94巻に及び、日本における最初の世界文学全集となっている。この「世界名作大観」に野上豊一郎による『高慢と偏見』（上巻）の邦訳が含まれている。[4]

研究社英文学叢書では、『Pride and Prejudice』が岡田みつによって注釈を施され、大正12年<1923>に刊行された。岡田は他に『Cranford』『Jane Eyre』『The Mill on the Floss』などの注釈も担当している。岡田が一流の研究者であったことは明らかだが、解説を読むと、まず良き読者であったことが感じられる。たとえばオースティンについて先生からシェイクスピアにも比すべき作家と言われたけれども、「どこがそんなにうまいのかわからなかった」のが、注釈をつけるうちにhuman natureを描く巧みさ、satirical humourが楽しめるようになったと回想している。それでもオースティンがあまり「俗受けしない」作家であることについて、次のように述べている。

Austenの作品を読んで先づ感ずることは、その中に胸を躍らせるやうな事件がないのと、何等激情の表現がない事とである。（中略）この点はBrontë女史のあの熱情的な*Jane Eyre*等と著しい対照をなしている。Austen女史の特徴は、情に訴へるよりも、むしろintellectに訴へる点にある。この作家の俗受けのせぬのは、恐らく之が一つの原因をなしているのだらうと思ふ。

岡田自身はブロンテを好んだことは、同じく英文学叢書で出版された『Jane Eyre』の序文で告白しているが、オースティンの文学史上における揺るぎない地位と評価については、次のように記している。

今では女史はその時代に流行児であった女流作家Miss EdgeworthやMiss FerrierやFannie Burneyなどを遙かに凌駕して、Brontë女史やEliot女史等と相並んで文学史上に強固安全な地位を占めてゐる。趣味あり眼識のある多くの人は女史の作を愛好し賞賛して措かない。けれども世間一般は今でもそれほどには思はない。作者の思想、書きぶりを知り、その妙味を悟るのに自らを教養して

ゆかねばならぬのでそれに飽き疲れる点もあるし、又、あくどい小説に馴れてゐるものには女史の小説は無味に感ぜられるのである。丁度強烈な百合の馨を好む人に梅の香が物足りぬのと同じであらう。Austen 女史を鑑賞しうるや否やは culture の試金石だとされている。

オースティンの世界についての比喩が絶妙である。また最後の一文には明らかに漱石の響きがある。

岡田の注釈から 3 年後の大正 15 年 <1926> に、「世界名作大観」の第一部（英国篇）第八巻、ジェーン・オースチン著、野上豊一郎訳『高慢と偏見』上巻として、初めての邦訳が国民文庫名著刊行会から出版された。全 61 章のうち 43 章までが収められている。（なお後半は訳稿が紛失するという憂き目にあい、その部分は後に平田禿木によって訳され、完訳が出されたのは昭和 3 年 <1928> になった。）「世界名作大観」の購読予約を募集するための紹介文のなかで、『驕慢と偏見』（当初のタイトル）の持つ魅力がわかりやすく伝えられている。

オーステンの行き方は何よりも非常に戯曲的で、全編殆んど対話を以つて運び、多少の地の文はあるけれども自然描写などは僅かに二三行あるのみで、更に不思議なるは容貌服装に関する叙述を一言半句も費さずして夫々の風采が目に見る如く現はれてゐることである。全篇の骨子としては主人公ダーシイの愛の驕慢と女主人公エリザベスの愛の偏見と此の対照にまつはる多くの興味の中で、殊にエリザベスの聡明な性格が次第に「完全な女性」の方へ自己を造り上げて行く努力の如きは、見方に依つては婦人教養の範を示したものと見ることをも得べく一方に於いて堂々たる写実派小説の代表作であると同時に、一方に於いては（言葉の正しい意味に於いて）の家庭小説の最良なるものと云ふを得るのである。[5]

漱石の絶賛した「写実の妙」を引き継ぎながらも、さらに新しく加わった点として、女主人公エリザベスの自己成長という評価があげられる。この視点はさらに、訳文に添えられたはしがきにおいて、次のような時代を感じさせる一節となって現れる。

『高慢と偏見』の女主人公エリザベスの如きは今日ショー等の強調する新しき女の間に伍しても毫も遜色なき理知的な進取的な、またショーの所謂最も女らしき女の一人であることを読者はやがて看取するであらう。まことに主知的な写実的な文藝の大道に於いて、我々はバーナード・ショーのすぐ前をゼーン・オースチンが歩いてゐるのを見る。

『青鞜』の解散で一時下火になっていた婦人運動も大正 9 年には、市河房江などをメンバーとして新婦人協会が結成され、やがて婦人参政権運動へと発展していく。「女性の解放と自我の確立を求める時代の声」を捉えることをめざして大正 5 年に創刊された『婦人公論』は女性のオピニオン・リーダー的な役割を持つようになった。[6] また、世界的な経済恐慌の中、社会主義運動が盛んで、大正 8 年に創刊された総合雑誌『改造』はラッセルやバーナード・ショーらに特別寄稿を求めたり、アインシュタインを招いて学術講演会など幅広い活動を展開していた。（いずれも後述する野上弥生子と深い関わりをもつ雑誌である。）こうした時代状況のなかで、エリザベスを「新しい女」の先駆者として紹介したのである。

野上豊一郎による「原作にくつ附いてゐたつもりの」訳文はひきしまった適度に生硬な文体で、雰囲気がよく伝わってくる名訳である。はしがきは、オースティンの成熟した作品世界を次のように賞賛している。

およそイギリス文学の小説の方面に於いて、オースチンの書いたものほど天衣無縫の完全に近いものは殆ど類例がない。第一に性格が生きて居り、事件の発達に無理がなく、表現が極めて妥当である。殊に何よりも推称すべきは全体が甚だ高い趣味で色づけられて、少しも生々しい所のないことである。言ひ換へれば大人の芸術である。

野上は、オースティンの観察の眼が神のように「何物をもそれが在るが如くに見て、それが在らねばならぬ如くに見ようと」せず、出来損ないの人間たちも等しく一個の「人格の面白き現はれ」として写し出している点を魅力として指摘している。また、主人公エリザベスにオースティン自身の俤がみられるといった説明もあり、いわゆる「俗受けのしない」作家に親しみを覚えさせ、その名訳によって読者を魅了したのではないかと思われる。

(三)

ジェイン・オースティンから最も多くを受容したのは野上彌生子（1885-1985）であろう。彌生子は夫の豊一郎を通して小説の手ほどきを受けていた漱石から、海外の女流作家の作品を紹介される。当時、彌生子はまだ22、3歳で、作品を読んで受けた感銘を後年、次のように振り返っている。

小説は『ジェーン・エア』をまず手はじめに、つづいて『プライド・エンド・プレジュディス』を読んだ。その時の強い感銘をいまだに忘れない。それは私には一種の開眼であったとともに、また深い失望であった。オースティンは二十三でそれを書いた。ちょうど同い年ぐらいであったから、自分のほんの習作のような貧しい短篇に思いくらべて、その素晴らしさに打たれるだけそれだけ自信喪失に陥ったのである。しかしそれ以来『プライド・エンド・プレジュディス』は私の愛読書となった。後年野上が翻訳した時、進んで筆記を手伝ったりしたのも当時の思い出からであった。[7]

漱石から借りて読み感動した『高慢と偏見』を豊一郎が翻訳したときに「筆記を手伝った」のは、これからおよそ20年後のことである。大正十五年七月三十一日、彌生子は夫の訳文の校正をしながら、「長編を書くならこのイキで行かねばならぬ」と思い、自分も「斯う云ふとりあつかひ方で一つ長いものを書いて見度い」[8]と日記に記している。さらに昭和二年十二月十四日の日記には「よむたびに賞賛のまさるのはこの小説である。これこそ一つの自然である、最も虚飾のない、最も平淡な素顔の人世である。（中略）せめてオースティン位は［と］おもつてゐた今度の長編もとても及びもつかぬ気がする」[9]と記している。

彌生子が『高慢と偏見』によって創作を刺激された長編小説とは『真知子』のことである。彌生子の初めての本格的な長編小説となった『真知子』は、昭和3年から5年 <1928-30> にかけて『改造』に連載された。『真知子』が構成、人物造形、テーマなどの様々な点で、『高慢と偏見』を下敷きにしたものであることは、すでに渡辺澄子氏、榎本義子氏らによって詳細に検証されている。[10] 両者を比較してみると、従来の便宜的な結婚をよしとしない自我をもつ知的な女性主人公、身分違いの名家の男性の求婚に対する偏見からの拒絶、他の男性への心の傾き、最初の男性への再認識などを通して、彼女たちが精神的な成長を遂げていくなど、物語の展開は驚くほど類似している。もちろん大きな違いもある。プロレタリア文学全盛の時代に書かれた『真知子』の主題となっている、昭和初期の社会意識に目覚めた知的女性の生き方の苦悩は、限られた枠のなかではありながらも十全に個性を発揮し、自らの手で幸福をつかみとっていくエリザベスの伸びやかな明るさとは異質なものである。

それでも『高慢と偏見』は彌生子の心を捉えて離さなかったものらしく、『真知子』の完成から5年後に『虹の花』と題した翻案を、『婦人公論』に昭和10年1月から11年4月 <1935-6> まで13回（36年1、2、3月は休載）にわたって連載している。漱石に勧められて読んでから、じつに30年近くの歳月が経っていた。明らかに豊一郎を参考にしたと思われるはしがきは、エリザベスの魅力を次のように語っている。

この物語は英国の女流作家ヂェイン・オーステン（1775-1817）の傑作として知られてゐる「驕慢と偏見」にもとづき、自由なかきあらためをしたものである。私は若い時分からこの原書を愛読してゐた。（中略）英国の小

説や戯曲から好きな女主人公を何人かあげて見よと云はれるならば、このエリザベスをまつ先に択ぶであらう。まことに彼女の知性と、それを裏づけてゐる明朗にしてゆたかな才智と、少しの虚飾もない率直と正義感に結びつけられた溌剌とした情熱に引きつけられないものはないと思ふ。彼女はまたバーナード・ショウなどの描く新しい婦人の先駆者とされてゐるだけに、他の古典の女性には感じられない一種特別な親しさで私たちを打つのである。[11]

『虹の花』は『高慢と偏見』を約半分に縮約したもので、随所に省略がみられるが、原作の持ち味を損なうことなく、物語もテンポよく展開し、楽しい読み物になっている。たとえば冒頭の部分は、ベネット家のおかれた状況をたくみに要約した、なめらかな書き出しになっている。

いかに気働きのないぐうたらな母親でも、婚期に近づいた娘をもって、神経過敏にならないものはないのですが、ベネット家には年ごろの娘ばかり五人もそろってゐるので、ベネット夫人は今はほかのことはなにも考えませんでした。それにロンドンからすこし引っこんだ田舎のロングボーンに住んで、ふだん交際してゐる同格の家と言っても数えるほどしかないから一さう気がもめるわけで、ちょっとしたお茶会でも、舞踏会でも、かうした母親にはどこでもさうであるやうに言はば大事な猟場なのでした。

「自由なかきあらためをした」というのは、原文を厳密に一字一句訳したものではなく、それらを自家薬籠中のものとして、自然な日本語の文体で語りなおしたという意味であろう。登場人物や筋書きなどにはまったく変更はなく、むしろ原文の込み入った詳細をそぎ落とすことで、エリザベスの結婚までの展開をたどるすっきりとした物語になっている。

彌生子の創作を感じるところは、ダーシーの自負の高さを優れた血筋の存続という意識、さらにその学問的な背景として「優生学」への信奉を付加している点である。該当の二カ所を引用する。

正直にいつて、ダーシーはこれほどまでに心を惹(ひ)かれた女には出逢つたことはなかったのでした。しかし、彼は古い貴族の家に生まれ、高貴な血統に対する信念は、彼が大学で興味を持ってゐた優生学(ユーゼニックス)の考へ方と結びついて一つの信仰にまでなつてゐました。[12]

彼は結婚が若い男と女の単なる情熱を基礎とする以上に、優れた血と立派な家系の存続を目ざすところに神聖な意味があると云ふ優生学的な考へ方を隠さず述べ、同時に実際問題となるとまた階級的に多くの面倒が生ずるのだと云ひましたが、それは取りも直さずエリザベスの家が伯爵でも大金持ちでもないのが、さうして家族的にも多くの故障のあるのが指摘されたのでした。[13]

ダーシーの階級的偏見を血統にまで拡大しているのは、一つには渡辺澄子氏の指摘する野上弥生子の「エリット主義」[14]と言えるものであろうし、また一つには明治末期から大正にかけてさかんに導入されたハーバード・スペンサーを中心とする社会進化論の日本における流布などの時代背景もあるだろう。

こうした一方では、彌生子は『虹の花』を少女向けの恋愛物語として加工している部分も見られる。風景描写や叙情性の少ない『高慢と偏見』に対して、「虹の花」はそのタイトルが暗示するように、いかにもロマンティックな場面が書き加えられているところがある。たとえば、物語の終盤（原作では58章）で、ダーシーとエリザベスが散歩に出て会話を交わしながら互いの思いを確認しあう場面には、以下のような背景描写が補足されている。

一本の黄ばんだ楡の幹をうしろにしてゐるダーシの彫像のやうな顔が、ぱつと不思議な焔で燃えあがりました。エリザベスには丁度その時枝のあひだで白い雲を剥いだ太陽のやうにそれが眩ぶしく眼に映り、同時にまた丁度その一束の光線のやうな熱いものが唇に灼

きつくのを感じました。ほんたうに太陽であつたか、ダーシであつたかエリザベスには分からなかつたが、本当はどちらでもよかつたのでした。ダーシこそは彼女に取つて、今はこの世界のたつた一つの太陽であつたのですから。[15]

野上彌生子にとって『高慢と偏見』は作家として学ぶべき作品であり、そこから生み出された『真知子』には翻訳調ともいうべき生硬な文体が見られるのに対して、『虹の花』は自由で伸びやかな色合い豊かな文体になっている。『高慢と偏見』は野上彌生子のなかで、完全に消化され自分の物語として新たな表現を得たのである。

注

[1] 野中涼・野中恵子訳『ラフカディオ・ハーン著作集』（第12巻）（恒文社、1982）116-7頁。

[2] 東京帝国大学での講義は明治36年<1903>9月から明治38<1905>6月まで。

[3] 石原千秋「小説の方法の模索」『岩波講座　日本文学史　第12巻』（岩波書店、1996）72-5頁。

[4] 田村道美「國民文庫刊行會の三つの翻訳叢書」『野上弥生子と「世界名作大觀」』（香川大学教育学部、平成11年）3-5頁。

[5] 田村道美「世界名作大觀予約募集見本及規程」（大正十四年）11-2頁。『野上弥生子と「世界名作大觀」』（同上）113-4頁。

[6] 『婦人公論の50年』（中央公論社、昭和40年）

[7] 野上彌生子「はじめてオースティンを読んだ話」『野上彌生子全集第二十二巻』（岩波書店、1982年）361-362頁。

[8] 『野上彌生子全集』第二期第一巻（岩波書店、1986）412頁。

[9] 『野上彌生子全集』第二期第二巻（岩波書店、1986）199頁。

[10] 渡辺澄子「『真知子』と『高慢と偏見』」『現代作家・作品論：瀬沼茂樹古希記念論文集』（河出書房新社、1974）226-234頁。なお同論文は渡辺澄子『野上弥生子の文学』（桜楓社、1984）に収められている。榎本義子『女の東と西―日英女性作家の比較研究』（南雲堂、2003）、窪田憲子「オースティンのもう一人の娘・弥生子―『高慢と偏見』と『真知子』（大東文化大学紀要27、1989）など。

[11] 「虹の花」『野上弥生子全集』（第二期第二十一巻、翻訳4、岩波書店、1987）303頁。

[12] 同上、339頁。

[13] 同上、481-2頁。

[14] 渡辺澄子『野上彌生子―人と文学』（勉誠社、2007）199頁。

[15] 「虹の花」（既出）620頁。

参考文献

・ 新井潤美『自負と偏見のイギリス文化』（岩波新書、2008）
・『岩波講座　日本文学史　第12巻』（岩波書店、1996）
・ 内田能嗣・塩谷清人編『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』（世界思想社、2007）
・ 榎本義子『女の東と西―日英女性作家の比較研究』（南雲堂、2003）
・ 田村道美『野上弥生子と「世界名作大觀」香川大学教育学部、平成11年）
・『野上彌生子全集』第二期第一巻（岩波書店、1986）
・ ―――.『野上彌生子全集』第二期第二巻（岩波書店、1986）
・ ―――.『野上彌生子全集』（第二期第二十一巻、翻訳4、岩波書店、1987）
・『婦人公論の50年』（中央公論社、昭和40年）
・『ラフカディオ・ハーン著作集』（第12巻、恒文社、1982）
・ 渡辺澄子『野上弥生子の文学』（桜楓社、1984）
・ ―――.『野上彌生子―人と文学』（勉誠社、2007）